



六 無存在の存在

「どうも。いたよです」

「どうも。いないよです」

「二人合わせて、無存在の存在です」

「いたよちゃん。今日はどうしたん？熱あるんとちゃう？」

「何、額を触っとんのん。熱はないわ」

「えらい、哲学的なこと言うから、びっくりしたわ」

「たまにはええことも言わんと、アホやと思われるやろ。やっぱり、勉強せなあかんで。勉強や。勉強や」

「ええ！」

「何、驚いとん？」

「いたよちゃん。アホとちゃうかったんや。いつもアホなこと言うとるから、てっきりアホやと思とったのに」

「それこそ、アホや。アホをしとんのは、仕事や。お仕事、お仕事。舞台の上は、かりそめの姿や。家に帰ったら、新聞や本を読んだり、わからんことはネットでサーフィンしたりして、勉強しとるで。普段の生活まで、アホしたら、ほんまにアホになってしまうし、生きていけんわ」

「かりそめ、やて。また、むつかしいこと言うわ。あたしも、かりそめしとんのか」

「いないよちゃんもか。何、かりそめしとんのか」

「ほら、この髪の毛見て。ところどころに、白いん入れてるやろ。仮に染めとんのか。次は、黄色を入れて、緑も入れて、赤も入れて、最後は黒や。どうや、オリンピック染めは。これで、世界が平和になるで」

「かりそめの意味が違うわ。ただし、髪の毛を染めんでも、あんたの頭の中は、平和やと思うわ」

「それ、どういう意味や。「かりそめ」って、髪の毛を仮に染めると違うんやったら、火縄銃で、「そめ」を狩るんかいな。まだ真っ暗の朝の三時に起きて、山に入り、抜き足、差し足、忍び足で、まだ寝ている「そめ」に近づくんや。「そめ」は夜行性やから、朝はまだぐーちよきぱーといびきをかきながら寝とんのか」

「どんな、いびきや。いびきでじゃんけんしとんのかいな」

「多分、夢の中で、仲間とえさの取り合いしとんのかやろ。「そめ」は平和主義者やから、争い事は好まんのや。そやから、じゃんけんで、エサ場を決めとんのかやろ」

「ほう、「そめ」はええ奴やなあ。ほんで？」

「その寝ている「そめ」に向かって、火縄銃を向けるんや。向こうは寝ているから、一発で仕留められるわ」

「平和主義者の「そめ」を人間は銃で殺すんかいな。人間は「平和主義者」やないんやなあ」

「そんなことないで。「そめ」を仕留めた後は、「平和主義者」になるんや。みんなで仲良く一

緒に、「そめ」を食べるんや」

「それは、平和主義やのうて、ご都合主義や。それにしても、今の時代に、火縄銃はないで。それに、「そめ」って何や。クマか、しかか、それともいのししか？最近、クマが人里にあらわれて人間を襲うらしいからなあ。イノシシも街中を走るらしいで」

「わかりましえーん」

「何、胸張っとんのや。わからんのに言うな」

「あーあ、わかった。近所に住む「刈り 祖芽」さんのことやろ。この人はえらい人で、毎朝、散歩しながらゴミを拾とんのや。人の家に入っては、新聞受けの新聞を取ったり、配達された牛乳を空にしたり、花が咲いとったら、摘み取って、自分の家に飾る有名人や」

「それは、犯罪やで。警察に言わんと！」

「ほんでも、たまに、「刈り 祖芽」さんにおうたら、「いないよちゃん。仕事がんばってるなあ。テレビ観てるで。これ飲んで」って、脇の下から牛乳を出すんや。それが微妙に温うて、人肌言うんかいな、美味しいんや」

「あんたも泥棒の仲間かいな。ほんまに「刈り 祖芽」さんいう人、おるんかいな？」

「わかりましえーん」

「またかいな。無理に、名前にせんでもええやろ。いないよちゃんは、早い話、かりそめの意味を知らんのやろ」

「おっ、上から目線やなあ。こうやって、あることないこと言うて、そのうち死んでいくんが、人間のかりそめの世界や」

「なんや、難しいこと言うなあ。ほんでも、あんたは、あることじゃなくて、ないことばかり言うてるで」

「なんせ、名前が「いないよ」やからな」

「もう、ええわ」

「どうですか」相変わらず電子カルテの画面だけを見つめている医師。こちらを見ようとしなくて、でも、その方が安心できる。見つめられると言葉が出てこない。診察室の椅子に座っただけでも、舞台上に立っているような気がするからだ。お客さんは1人。確か、いたよちゃんとコンビを組んだ最初の頃は、お客さんが一人だった。それでも、舞台の上でしゃべり続けた。お客さんのことは目もくれずに、目の前の、いたよちゃんを笑わすことに一生懸命だった。多分、お客さんを見る余裕がなかったからだろう。それでも、そんな舞台を繰り返し続けた。

ある日、「あっはっはっ」とあたしの耳に笑い声が聞こえた。いたよちゃんの声じゃない。男の人の笑い声だ。あたしはその笑い声がする方向を舞台の上から見た。観客席の一番後ろの席だった。年齢は五十歳ぐらいだろうか。背広を着ている。中年のサラリーマンか。仕事の帰りか。大きな口を開けて笑っている。そんなに面白いことをあたしは言ったおぼえはない。

あたしはその男の人を見た。そして、舞台の右奥から左奥、真ん中、前の端と、全体を見回した。お客さんの数はまばらだ。でも、よく見ると、サラリーマンのように、笑い声は出さないけれど、手に口を当てたり、俯いて肩をふるわせたり、かすかに口を開けたりと、それぞれの方法

で笑っている。お客さんが笑っている。ほっとした。緊張が緩んだのか、その笑い声であたしも一緒に笑った。面白かった笑いではない。安心し、安堵した笑いだった。

「いないよちゃん。あんた、どこを見てんの？お客さんが笑うんを見てる暇があったら、面白いこと言ってよ」いたよちゃんが突っ込んで来た。

あたしは横を見る。いたよちゃんも笑っている。目で、このままでいいんだ、と合図している。あたしはようやく、お笑いができたと思った。お笑いは、あたしだけでやるものじゃなく、あたしといたよちゃんとでもやるのではない。舞台を観に来ているお客さんと一緒にやるものだ。どれ一つが欠けても成り立たないものなのだ。

だが、今は、いたよちゃんがいなくなり、合わせて、舞台も、お客さんも失った。笑いを得るために苦労し、時間がかかったにも関わらず、それを失うのは、こんなにも簡単で、早いものなのか。あらためて、自分の過去を振り返る。

「変わらないですか」医師がくるりと椅子を回し、あたしに向いた。

「ええ。変わらないです。変わりたいです」

「そうですか」

医師は再び、くるりと椅子を回し、再び、画面の電子カルテに「変わりなし」と打ち込んでいる。普通、変わりなしは、異常じゃない、良好な場合に使われる。だが、今、面白いことが浮かんでこない、面白いことが言えない、結果、人前に立てない、仕事ができない、その異常な状態が、普通の状態、変わらない状態なのだ。変わりたいのに、変われないあたし。

「それじゃあ、また、一か月後に来てください」

医師が再び、こちらに向いた。あたしは、はい、と返事をして立ち上がり、診察室から出た。